2025 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	山口　瑞穂
研究テーマ	アドヴェンティスト明石順三とその宣教に関する研究
研究概要	灯台社による宗教運動を、アドヴェンティスト（再臨主義者）としての明石順三の運動として捉え直し、戦前における国内の再臨主義者・終末論者による宗教運動との比較・検証を目指す文献調査を中心とした研究。

１.研究活動の概要と研究成果	本年度の研究活動の概要としては、灯台社の機関紙『黄金時代』を中心に文献調査をおこなった。 とりわけ今年度は、伝統仏教教団でいうところの教化と灯台社の宣教の差異にも着目した調査研究をおこなった。明らかとなったのは、①同誌において批判の対象となっていたのは、仏教界ではなくキリスト教界であり、②キリスト教徒やキリスト教会が人々を救済に導くためにおこなう社会的な実践、キリスト教の有益性・有用性に関する主張や社会への働きかけに対し、同誌の主筆である明石順三は、時に辛辣な批判を誌上や講演において展開したが、③批判の焦点は、それらの運動や主張内容の是々非々にではなく、それらがキリスト教の名のもとにおこなわれていることに当てられていた点などである。 明石の宣教活動には世界の終末が近いことへのアドヴェンティスト的な危機意識と日本人を救済の側に導きたいというナショナリスト的な側面があり、教勢拡大の技術としての布教活動とは異なっていた（異なるものであろうとしていた）。ただし、ラディカルな終末論が一方的に運動を方向づけるわけではない。終末論自体も時代や社会に応じて変遷するという相互的な面について、引き続き検討中である。
２.学術論文・学会発表等	〔論文等〕 単「キリスト教の「受容・定着」研究とその批判的継承」『森岡清美の宗教社会学』大谷栄一・寺田喜朗編（コラム 4）、pp.178-185、法藏館、(2025 年 5 月、査読無） 〔発表〕 「キリスト教系新宗教「灯台社」の日本宣教と教化 」(「近代日本の教化政策と伝統仏教教団の教化活動の総合的研究」プロジェクト主催シンポジウム「近代日本の公共空間における宗教団体の教化活動」(2026 年 2 月 28 日、佛教大学))
３.今後の課題	今後の課題としては、他の宗教運動の終末論自体も社会状況に応じて先鋭化／穏健化してきた面にも着目しつつ、灯台社の宣教と終末論に関するこれまでの研究内容を論文化することである。